

入選 福井県 山埜 智彦 様（50代 男性）

私は小さい時から、両親の愛情に包まれ、またその愛情に自らも十分に甘えてきました。

私は高校を卒業すると、いよいよ親元を離れ、福井を出て大阪の大学に入りました。一回生、二回生とは、同級生並みに単位を取りました。私は建築学科に籍を置いていました。設計事務所でアルバイトをしているうちに、先輩たちの一日中机にはりついて頑張る実務を見て、だんだんと自信がなくなりました。

私は週末だけ行っていた学習塾のアルバイトの方に、次第に興味が移っていったのです。

私はいつのまにか学校から足が遠のき、塾のバイトに週五日間も通うようになりました。結果、三回生で取得した単位は僅か五単位でした。この先も身が入らないと思った私は、正式な塾講師を目指し、塾通いに没頭しました。

親にも詳しいことは何も告げずにいました。当然学校にも何の連絡もせず、不登校になりました。塾で正式の講師に採用された頃、実家に学校から、除籍の通知が届きました。

両親は学校を辞めた事よりも、何も相談しなかった私にショックを受け、失望しました。今まで私を見守り、十分な愛情を注いできたという満足と自負があったからでしょう。

父には勘当同然に見放されましたが、その後で見え隠れしながら、母は私のことを気にかけてくれました。しかし父への反発が増幅していった私は、母への連絡もとどこおり、一時は母でさえ、私の住所を知らない時期がありました。そんな月日が二年程過ぎた頃、親戚のおばから、母が癌の通院治療を受けていることを聞きました。

私は半年をかけて、自分が独立をしてやっていた小さな学習塾を整理して実家に帰ったのです。その半年後に残念ながら、母は亡くなったのです。母が亡くなった父の寂しさも手伝い、私と父は次第にうち溶け、私は父のガソリンスタンドを

手伝うようになりました。

そんなある日、私に薄青色の大きな封筒が届きました。それは社会保険庁からの「ねんきん定期便」でした。

記載内容を見て私は驚きました。母は私が二十才の時から母が入院する二十六才の五月まで、一回も欠かすことなく私の年金を掛けてくれていたのです。

私は現在五十八才です。私は七年後に開始される私への年金支給をありがたく待っています。反面又思い悩むのです。若げの至りで父、母から遠のいた私は、母の暖かい愛情も自らの意志で捨ててしまいました。もう取り戻すことのできない母の愛に、私は後悔と無念さがいつも心の隅に漂いながら、未練が残っていました。

しかし今になって気がついたことがあります。七年後に受けとる年金には、母が黙って掛けておいてくれた七年間が含まれるのだと。

すると私は、自ら放棄した母の愛に、再びめぐり逢うことができ、再び母は、私の日々の暮らしを見守ってくれるのです。私は年金を受け取れずに亡くなった母の分も長生きをして、年金に感謝をし、大切にに使わせてもらおうと思っているのです。